
神の代理と被害者 A

鈴野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の代理と被害者A

【Nコード】

N3914X

【作者名】

鈴野

【あらすじ】

例年並み、いや下手をすると例年以上の暑さの夏。いつも通り芦内晋也はいじめられていた。ビリビリに破かれた教科書をかばんに入れ、さっさと帰ろうと思ったのだが校門にさしかかったところで異変が起きた。そして神の代理人と出会い。さらにその翌日、偶然かはたまた必然か芦内晋也をいじめていたいじめっ子が死んで

第一話 胎動

うだるように暑い夏の午後。余命幾ばくかとなった蝉がジリジリと鳴いている。夏の風物詩ともいえる蝉の鳴き声と共にこの中学校では“いつも通り”の光景が広がっている。

教室の隅には丸まったものが転がっている。しかしこれは、ゴミ袋でも迷い込んだ猫でもない。丸まっているのはこのクラスのいじめられっこ、芦内晋也だ。晋也を取り囲む数人の生徒は、彼に暴力を振るっている。しかし彼は抵抗しない。する気もない。誰も気にも留めなかったが、晋也は気にしない。これが彼の日常なのだから。面白いように蹴られた後、飽きたいじめっ子はさっさと帰ってしまった。

晋也はゆつくりと立ち上がり、いじめっ子に巻き散らかされた教科書を集めた。教科書を集めるや否や、適当に帰りの支度をし、びりびりに破れている教科書が詰め込まれたかばんを背負って晋也は教室を出た。

いじめっ子に鉢合わせにならないよう祈りながら校門を出ると、そこには見慣れた通学路は無かった。始めて見る紫と黒の世界。漂う無数の炎。赤、青、黒のように色が分けられている。

そして、晋也の目に留まったのは玉座だった。後ろを向いているが、とても立派なものだろうと考えるのは難しくなかった。どこか分からない不気味な場所だが、晋也は玉座に見惚れていた。まあ、晋也が見惚れるのも無理はないだろう。あまりにも、その玉座は美しく、立派であり、万人を魅了できる雰囲気があったのだ。恐らくこの玉座を見たものは皆立ち尽くすだろう。それだけの“雰囲気”がある。だが、なぜか悲しみの“雰囲気”も漂わせていたのだ。

そのとき、ふと、玉座から人影が見えた。このときの晋也の心境は複雑なものだっただろう。あの玉座に座っているような人とはどのような人物なのだろうか？、と気になる反面、本能で「ヤバイ！」

、という危険を感じ取ったはずだ。そして、あせって離れようとした晋也は足がもつれて転んでしまった。

(早く逃げなきゃ！)

晋也は必死に足をあげようとするが、立ち上がった人影に呼び止められる。

「やあ、こんにちは。芦内晋也君。ご機嫌いかが？」

晋也は青年を恐ろしく感じた。逃げたい、逃げたい。この人はヤバイ。本能を感じ取ったのだ。

胸が張り裂けそうになるこの沈黙を紛らわせるためか、この青年が気になったか、あるいは両方のためにか晋也は震える声で尋ねた。「あなたはどちら様ですか？なんで僕の名前を知っているんですか？どうしてこんな所にいるんですか？」

気が動転した晋也は初対面のいわゆる“怖い人”に三つも質問をしてみました。後悔した。この人が答えてくれるだろうか？いじめにより人を信用することが難しくなりつつあった晋也にはこれだけで精神的にきついのだ。が、“怖い人”は晋也とは違い、余裕があった。あたかも今までに何度も聞かれた質問に答えるかのように“怖い人”は答えた。

「僕かい？僕は代理人さ。ここにるのはね、そういう義務があるからだよ。出られたらどんなに良いことか……！」

余裕綽々で答える代理人と名乗る青年に晋也は強めの口調で言うてしまう。

「なぜ僕を知っているかという質問にまだ答えてもらってない！言うてくれよ！」

代理人は返す。

「初対面なのによくもまあそんなに矢継ぎ早に質問できるねえ、君はまだ僕の求める君じゃなさそうだな。僕を知らないんだから」

彼は意味不明なことを言った。

(頭……沸いてんのかな……)

「なあ、晋也君。今君、僕のことを頭沸いてるって思ったね？失礼

だからやめてくれないか？非常に不快なんだが」

「なんで分かったのさ」

「言つてなかった？僕は神の代理だよ？民衆どもの愚かな考えも見分けられないやつなんかいたら意味無いでしょうに」

神の代理？読心術？僕の求める君？

（なんか夢でも見てる気分だ……）

「夢みたいでしょ？やっぱり。まあ、自己紹介もしたし、もういいや。また明日。芦内晋也君」

また読まれた……そう考えるのとほぼ同時に、視界がフラッシュバックする。

（貧血かな……お弁当……トイレに捨てられたんだっけ……）

何も見えなくなっていくなか、晋也はいじめを思い出した。忌々しき、恒例のいじめを。

（夢だったら……覚めなきゃいいのに……）

晋也の意識はそこでぶつりと途絶えた。

ふと目を覚ますと、そこは見慣れたつまらない通学路だった。晋也はとっさに周囲を確認し、いじめっ子の存在の有無を確認した。

……いじめっ子はいなかった。ここでやっとな晋也は一息つけた。晋也には日々のいじめにより、まずいじめっ子の存在を確認してからなにかをする、という習慣ができてしまっていたのだ。

（やっぱり夢か……）

晋也は破れた教科書が詰まっている重いかばんを背負い直し家路を目指した。

（明日はどんないじめを受けるのかな……）

そもそも晋也がいじめられているのは、彼の容姿が悪かったわけでも、彼の性格が悪かったわけでもない。ではなぜいじめられているか。それは彼の母が原因だ。晋也の母は水商売をしていたのだが、不倫して父の元を離れて行ってしまった。この話がでてから晋也は『最低の人間の息子』やら『母に見捨てられたクズ』などと変なレ

ツテルを貼られ、今に至る。そんな原因で始まっていたいじめは大分工スカレートしていったが、晋也はもう慣れてきている。とはいえ苦痛であることは変わらないが。

通学路を歩いている時、晋也はふと思った。

(代理人つて人……友達になれるかな……)

突然だが、芦内晋也には友達がいらない。もちろん、晋也の母が出て行く前はそれなりに友達がいた。しかし、今では友達の数、0だから晋也は友達欲しい。するとどうだろうか。友達になれそうな人がいたではないか。そう、代理人だ。それで晋也は代理人と友達になりたいと考えた。さあどうやって、友達になろう、そんなことを考えているといつの間にか家に着いていた。

その日の夜は今日のことと頭がいっぱいで眠れなかった。

翌日は珍しく晋也はいじめられなかった。どうやらいじめのリーダー格が死亡したらしい。なぜ?と考えたが、いじめられなかったことが何より嬉しかった。久しぶりに捨てられずに食べるのできたお弁当を晋也は心から味わって食べた。

晋也はお弁当に入っていた飴玉を食べようとはしなかった。

(確か今日も会うんだよね……一緒に食べよつと)

と代理人と自分が美味しそうに飴玉を舐めているところを想像し、代理人に早く会いたくなつた。

晋也はポケットに飴玉をしまつと五時限目の授業に備えた。その後、英語、現国、歴史と授業があったが、晋也の頭にはまるで入らなかった。

学校が終わつた晋也はわくわくしていた。理由は言うまでもあるまい。また校門からつながるのか、どういう仕組みなのか、考えているうちに校門に到着した。そこで深呼吸し、一步踏み出した。が、何も起こらない。

(やっぱり夢だったのかな……)

下を向いたその時、晋也の求めていたその部屋に辿り着いた。

「やや、こんにちは。今日も来てくれたか、良かった良かった。」

代理人はニコニコと笑う。

晋也は勇気を出し、言った。

「飴玉持ってきたんだけど……食べる？」

「ずいぶんと唐突だねえ……。それはそうと飴玉をくれるのかい？
くれるなら是非欲しいな」

晋也は無造作にポケットから飴玉を取り出す。

「はい、どうぞ」

代理人と晋也は一息ついた。

「で、君をここに呼んだ理由なんだけどき。君には僕の代わり、というか代理人を継いで欲しいんだ。まあ強制はしないし、仕事の方法だって教えるから。どう？興味湧かない？」

（どうしようかな……何するのもも分らないし……）

「心配なら必要ないよ？僕ができる限りのサポートはしてあげるさ。この仕事にはもう飽きてしまったんだよ。友達の頼みごと、聞いてくれないか？」

友達、晋也にとって夢にまで見た言葉が代理人の口から出る。

「出来るのなら、やってみたい、かな……」

晋也は二つ返事で首を縦に振った。

第二話 炎と人殺し

「本題の仕事の話だけど……」

代理人が切り出す。

「君をいじめてたグループのリーダー格、死亡したでしょ？理由、分かる？」

「分からないけど……どうして知っているの？」

代理人は口角を上げ、話しだす。

「それはね、僕がやったからだよ」

へらへらと代理人は言った。自分が殺した、と。

「で、でも死因は分からないんだ！嘘はやめてくれ！」

「本当さ。言っただろ？僕は神の代理だ。それにね……それが仕事だから」

晋也の思考は停止した。

代理人がいじめっこを殺して、それが仕事。次からそれをやるのは自分。

自分に耐えられるだろうか……とも考えた晋也だったが、やはりそこで考えるのをやめた。

「そういえば、殺すっていう表現で君は考えたけど違うよ。この行為はね、神が増えすぎた人間を間引く行為だよ。下賤な人間どもの同属殺しなんかといっしょにしないでおくれ」

「神様だったら……そんなことするはずないだろ……？」

「君は何を言っているんだ？君のいう神様とやらが人間を作ったとはいえ、人間の片棒を担ぐとは限らないじゃないか」

いつもより強めな代理人の口調に晋也は戸惑いを隠せない。

「言わなきゃ埒があかないか……説明するよ。君もそろそろ気になっっていただろうが、この部屋に漂う炎、あれは人の命だ。あれを消すとその炎に対応した人が死ぬ。それを淡々とやって欲しいんだ」

彼、代理人は説明した。今まで何気なく見ていた、ただきれいな

炎だなと感じていた炎は人の命なんだ、と。晋也は考えた。一応言っておくが、晋也は常人である。特別スポーツができるわけでも、頭が切れるわけでもない、常人である。そんな晋也に人生が変わってしまうような質問を軽く投げかけるのはあまりにも酷なことではないだろうか。そう、あまりにも酷だが、代理人は晋也のことなど気にしない。晋也は悩んだ末にひとつ、作戦を思いついた。その作戦とは、

「……僕に人の命を終わらせろ、って言うの？」

質問して情報を得る、だ。

「そりゃあそうさ。それが晋也君にしてもらいたい仕事だから」

「でも……」

晋也の作戦は功を奏さなかった。そして代理人は、たいした成果をあげることができなかった晋也に追い討ちをかける。

「答えるならYesかNoで答えてくれ。君じゃなくても代わりはいるさ。何人でも…それこそ無限にね」

お茶を濁す晋也と追い詰める代理人。

「分かった……やるよ」

数秒後、晋也は俯きながら呟いた。

「……それはよかった」

晋也が呟いたと同時に代理人が安堵したかのように見えたのは、錯覚ではないだろう。その後、代理人は口を閉じて何かを考え始めた。

しばしの間、沈黙の時間が流れ、ついに代理人が重い口を開いた。「それじゃあ炎を消す基準だが……そうだな。炎の色の説明から始めようか。赤は人間としてのセーフライン。健康、かつ善人。多少の裏があるとはいえ、無罪だな。次に青、これは病人、怪我人の人達だ。人間次第だが、セーフでいいよな。最後に黒。これはアウトだ。気に病まなくてもいい。躊躇なく炎を消してやってもいいさ。炎を消す方法だが……手で包めば簡単に消える。ほら、消えたでし

よ？」

代理人はおもむろに手元の黒い炎を消した。これは代理人の仕事の方法を晋也に伝えたとともに、誰かが死んだ証だ。

「黒を消していいのは分かったけど……赤と青は消しちやいけないって事？」

晋也は一つ問いかける。

「そんな事も無いな。気まぐれで消しても良いんじゃないか？ただし熱いぞ。黒はそうでもないんだけど。試しになんか消してみなよ」
言われた晋也は一つ手短な黒い炎を消してみた。

「なんか……普通だね……」

黒い炎は熱くも冷たくも無かった。感触も無い。

「黒はそんなもんさ。青と赤も消してみるといい」

「じゃあ青から……あれ？なんか冷たい」

青い炎は予想より冷たかった。金属に触った程度の冷たさだったが、炎なので熱いだろうと晋也は考えていたので驚きは隠せなかった。

「だろ？僕も消すたびそう思うもの」

「へえ……赤も消してみるか……」

「……ってあつっ！何これ熱い！」

赤は普通に熱かった。普通の炎の熱さではないだろうか。晋也は熱さに悶えていた。かろうじて炎を消すことができたものあまりの熱さに晋也はすこし硬直していた。

「ははは、そんなに熱いかい？オーバリアクションで面白いや」
けらけらと笑う代理人。晋也はその行為に少しの苛立ちを感じたが、悪気はないだろうと自分を落ち着かせた。

「ところでさ晋也君。今君三人の命を奪ったけど……気分はどう？
言われるまで気づかなかった。晋也は人を殺したのだ。罪悪感が今になって晋也を押しつぶそうとしてくる。晋也はわなわなと答えた。

「悪いことしちゃった……どうしよう……うわあ……」
「まあ慣れるまでには時間がかかるだろうね。じき何も感じなくなるさ」

代理人の軽い一言が晋也には効いた。

『何も感じなくなる』人を殺すのに等しい事をやっているのにもかかわらず楽観視している代理人を晋也は理解出来なかった。しかし、理解出来ないからと逃げてはいけない様な気もした。勝手に与えられた使命から逃げるか、はたまた人の命を軽く見た行為を繰り返すか、気の弱い晋也は逃げる事を選びたかったが、代理人の言った、

『君は僕の求める君じゃない』

というのはどうも気にかかる。落ち着かない頭で必死に考えた晋也が出した結論は、

『今の自分は代理人の御眼鏡に適う能力を持ち合わせていない。それが人を重く見すぎるから』

だった。碌でもないし、そんなわけないだろうと代理人本人すら良いそうだが、晋也にとってはこれが1番正しい答えだった。一人で勝手に吹っ切れた晋也はもう一つ炎を消してやろうと一つの黒い炎に手を伸ばす。すると、いままで気づいてなかったただけなのだろうか？炎が誰の命なのか分かるようになっていた。晋也は誰か分かるようになった事にすこし驚いたが、なんら問題はないと踏んだのか、躊躇なく揉み消した。

「今四人目の命を消したけど……どう？慣れたかい？」

「……そこそこだね」

代理人に向き直り晋也は言った。

「そうか、それは良かった。他にも間引く手段はあるが……主な方法は今教えたやり方だけだから。あとは自分なりに探してみておくれ。そろそろ時間かな？家に帰ったほうがいいんじゃないか？」

「そうだね。でもさ、どうやって帰るのさ」

前回、気がついたら帰っていたので帰り方を晋也は知らない。

「目を閉じてみる」

晋也は代理人に言われるがまま、静かに目を閉じた。

「……ゆっくり目を開ける」

言われたとおり、今度は目を開けると……そこはやはり通学路だった。

『別の間引きかた』はどのような物か考えながら晋也は家路を急いだ。

帰ってからテレビのニュースを見ると、死因不明の死亡者が五人発見、という趣のニュースが流れていた。

それは晋也にとっていつも聞き流していたようなニュースだが、今回ばかりは違う。その死亡に関わっているから、それに五人のうち四人を晋也が手にかけたからだ。晋也はまたしても罪悪感に押しつぶされそうになった。その後の晋也は実に挙動不審だった。恐らく、代理人が見たらまたけらけらと笑うだろう。そんな風に晋也は今日の残りを過ごした。

前日とは違う理由だが、今夜も晋也は安眠出来なかった。

第三話 二人の

四人の命を奪った晋也は翌日、寝不足によりげっそりとしながら登校した。

「おはようございます……」

律儀に挨拶して教室に入ったが、いつもと今日は違った。

教師側が黙認さえしてる晋也へのいじめが始まらないのだ。

リーダー格の死亡からだろうが、晋也にとっては平和に毎日を過ごせるのが1番なのだ。もっとも、四人もの人を殺したのだから心中穏やかではないが。

今日の授業は理科、英語、美術、体育、国語、数学、社会だったが、またも頭に入らなかつた。いくらなんでも最近授業に身が入ってなすぎではないだろうか。晋也自身そう考えていたが、どうしようもないと諦めた。

そんなただただ、ぼーっと過ごした晋也はふらふらと帰っていった。

まあ、帰ろうとしても結局あの部屋へ来ているわけだが。

「あれ？晋也君……クマできてるぜ？どうかしたかい？」

クマを作る原因は代理人にあるのだが彼はその事に気づいていない。

「今日は何をするの？」

「……決めてないや。」

間を置いて代理人が言った。

晋也は、は？と良いそうになったが堪えた。言わなくても代理人は心が読めるのだからこっちの意見は通るはず。そんな淡い期待を寄せていたが代理人は……

「適当に間引いとして」

非情だった。

やることが無く退屈で仕方のない晋也はとりあえず黒を消してい

った。

そんな中、見覚えのあるような人の炎を消したが晋也はもう気にしなかった。本当に間引くだけだった今日だったが、晋也は何も言わなかった。家に帰ってさっさと寝たい。その一心で間引き続けた。「ん、今日はこんなもんで良いんじゃない？」

代理人が終了の許可を出した。晋也は部屋から出ると同時にささつと家へ駆け出す。

「いつ彼を処分することになるかねえ……」

晋也が帰ったあと代理人は不敵な笑みを浮かべた。

次の日、ちゃんと安眠できた晋也は軽い足取りで学校へ向かう。

その時だろうか、晋也は一つの事を発見する。

(なんで皆の心臓の辺りが燃えてるんだろう……！？もしかすると……)

そう、人の体に直接命の炎が見え始めたのだ。

(新しい間引きかたつてのは……こうかな？)

近くを歩いていた男性の心臓の辺りを晋也は力強く掴んだ。男性は声にならないうめき声を上げたあと、地面に倒れ伏せた。

(脈はない……やっぱりそうか……！)

晋也はもうすでに人を殺めた事に罪悪感を抱いちゃいない。しかし、晋也は気づけなかった。ここはあの部屋と違い、普通の道であることに。

ふと右を見ると、口を押さえ啞然とする女性がいた。目撃されたのはいくらなんでもまずいだろうと思った晋也はその女性も殺してしまった。

あの部屋での行動なら目撃されず、『間引き』と言い切れるだろうが、目撃され、かつ道でのこれは『間引き』ではなくただの『殺人』であろう。

しかし晋也は焦らなかった。警察が寄ってくれば警察だって殺せばいい。胸に自分の指紋が残っても死因との直結はしないだろう。

と考えていたからだ。『間引き』として殺人を行う事に晋也は優越感をえ、いじめられなくなったことは晋也の残虐性を目覚めさせた。そして晋也は一つの仮説をたてる。

(代理人もこれで殺せるはず……そうすれば神の代理人は僕だ……！)

愚かな行為、それは分かっていたが晋也はそんな事は気にしていない。それに気づいていない。代理人代理である晋也と代理人を比べたら、どちらが強いかを。自分は神の代理の代理であることを。

(こうしちゃいられないな……部屋まで向かおう……)

晋也は部屋まで向かった。

部屋に辿り着いた晋也は一言代理人に言った。

「さよなら」

代理人にも命の炎はある。これを消すだけだ。晋也は手を伸ばし、代理人の命の炎を掴んだ。

これで代理人が死に、自分が代理人になれる！と晋也は喜んだ、が、

「ああ、そうだね。さよならだ」

死んだはずの代理人が呟いた。

(何で？何で何で何で何で何で何で何で何で何で！?)

晋也はさらに力を込めるが代理人はびくともしない。

「苦しいから離してくれよ」

そついうと代理人は晋也の胸へ手を伸ばす。

ズブツ……

代理人の手は晋也の炎を消すのではなく身体の中へ入っていった。

「心臓は……これか」

代理人が晋也の『何か』を掴むと晋也は嗚咽を起す。体が動かない。辛うじて見えるのは鋭い眼から若干の怒り、というより嫌悪を覗かせる代理人だけだ。

「君は本当に馬鹿だよ。何も言わず間引くか殺人してればいいのに。わざわざ僕を殺そうとしにくるとは。そういえばさ、君を僕の後続にする、って言うってたでしょ？あれさ、やっぱり無しにしてくれない？なんか君の行動みてたらこんなのが僕と一緒に思って嫌になっちゃうてさ。そういう事だから。さよなら」

代理人は晋也から掴んだ物を引き抜いた。

「君みたいなのが芦内晋也だと思つて嫌になつてくるよ。同じ自分なんて考えられない。もう二度とこないでおくれ。……ってもう死んでるか……心臓をちぎつたんだ。生きてるわけないね」

あつけない　この場に人がいたら誰もがそう思うだろう。

晋也は代理人を殺そうとしたが殺せず、逆に代理人に殺されてしまった、これじゃまるで打ち切り漫画じゃないか、と。

晋也の死体に背を向け、立ち去ろうと足を進めていた代理人が足を止め、代わりに口を動かした。

「……あ。そうだ。そういえば僕の名前を教えて無かったね。僕の名前は芦内晋也。『君』と同じさ」

代理人、もとい芦内晋也は何処かへ行ってしまった。残ったのは帰らぬ人となつた晋也だけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3914x/>

神の代理と被害者A

2011年10月22日03時12分発行